

# 線形代数(III, 固有値)

関西学院大学・理工学部・情報科学科 西谷滋人

-数値計算(10/10/29)-

## 1 固有値の幾何学的意味

前回の逆行列にひきつづき、固有値に関して具体的な計算方法を示す。まずは、固有値の幾何学的な意味を2次元行列で確認しておこう。ある点  $x_0$  に対称正方行列  $A$  を作用すると、 $x_1$  に移動する。これを原点を中心とする円上の点に次々に作用させ、移動前後の点を結ぶ。

```
> restart;
with(LinearAlgebra):with(plots):with(plottools):
A:=Matrix(1..2,1..2,[[3,2/3],[2/3,2]]);
```

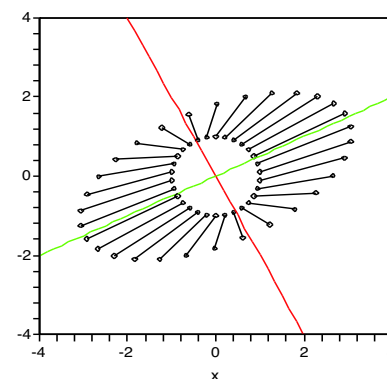
$$A := \begin{bmatrix} 3 & 2/3 \\ 2/3 & 2 \end{bmatrix}$$

```
> N:=30:p1:=[]:l1:=[]:
for k from 0 to N-1 do
  x0:=Vector([sin(2*Pi*k/N),cos(2*Pi*k/N)]);
  x1:=MatrixVectorMultiply(A,x0);
  p1:=op(p1),pointplot({x0,x1});
  l1:=op(l1),line( evalf(convert(x0,list)),evalf(convert(x1,list)) );
end do;
```

こうすると次のような図形が描かれる。始点をうまく選べば、原点から引いた同一直線上にのりそうである。これが変換の主軸 (principal axis) と呼ばれるもので、互いに直交する。

```
> principal:=plot({1/2*x,-2*x},x=-4..4):
```

```
|display([principal,op(p1),op(l1)],view=[-4..4,-4..4],axes=box);
```



## 2 固有値

$A$  を対称正方行列、 $x$  をベクトルとしたときに、

$$Ax = \lambda x \quad (1)$$

の解、 $\lambda$  を固有値、 $x$  を固有ベクトルという。 $x$  がゼロベクトルではない意味のある解は特性方程式  $\det(A - \lambda E) = 0$  が成り立つときにのみ得られる。

まず Maple で特性方程式を解いてみる。

```
> x:=Matrix([[1,0],[0,1]]):
Mat_E:=A-lambda.x;
```



```
> eq2:=Determinant(A-lambda.x);
```



$$eq2 := \frac{50}{9} - 5\lambda + \lambda^2$$

(3)

```
> solve(eq2=0,lambda);
```

10/3, 5/3

固有値を求めるコマンド `Eigenvalues` を適用すると、固有値と固有ベクトルが求まる。ここで、固有ベクトルは行列の列 (Column) ベクトルに入っている。

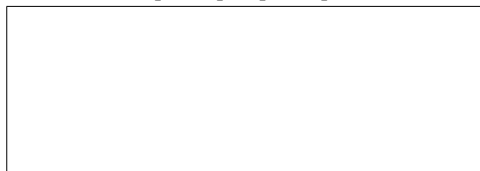
```
> (lambda,V):=Eigenvalues(A);
```

$$\lambda, V := \left[ \begin{array}{c} 10/3 \\ 5/3 \end{array} \right], \left[ \begin{array}{cc} 2 & -1/2 \\ 1 & 1 \end{array} \right]$$

n 次元の固有値方程式は (n+1) 個の未知数を持つ n 次方程式であるので、解を特定するためにはさらに規格化条件が必要となる。  
方程式 (1) が成り立っていることを確認する。

```
> lambda[1].Column(V,1)=A.Column(V,1);
```

$$\left[ \begin{array}{c} \frac{20}{3} \\ 10/3 \end{array} \right] = \left[ \begin{array}{c} \frac{20}{3} \\ 10/3 \end{array} \right]$$

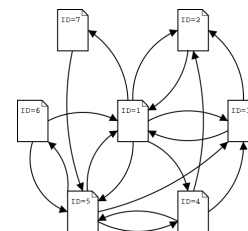


(4)

### 3 Google のページランク

多くの良質なページからリンクされているページはやはり良質なページである

Google の page rank は上のような非常に単純な仮定から成り立っている。ページランクを実際に求めよう、つぎのようなリンクが張られたページを考える。



計算手順は以下の通り<sup>1</sup>。

1. リンクを再現する隣接行列を作る。ページに番号をつけて、その間が結ばれている i-j 要素を 1、そうでない要素を 0 とする。
2. 隣接行列を転置する
3. 列ベクトルの総和が 1 となるように規格化する。
4. こうして得られた推移確率行列の最大固有値に属する固有ベクトルを求め、適当に規格化する。

### 課題

1. 上記手順を参考にして、Maple でページランクを求めよ。
2. このような問題ではすべての固有値・固有ベクトルを求める必要はなく、最大の固有値を示す固有ベクトルを求めるだけでよい。初期ベクトルを適当に決めて、何度も推移確率行列を掛ける反復法でページランクを求めよ。

<sup>1</sup>詳しくは <http://www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/baba/wais/pagerank.html> を参照せよ。

隣接行列

$$A1 := \left[ \begin{array}{c|c|c|c|c|c|c} & 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \\ \hline 1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 1 & 0 & 1 \\ \hline 2 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ \hline 3 & & & & & & & \\ \hline 4 & & & & & & & \\ \hline 5 & & & & & & & \\ \hline 6 & & & & & & & \\ \hline 7 & & & & & & & \end{array} \right]$$

転置行列

$$Transpose(A1) := \left[ \begin{array}{c|c|c|c|c|c|c} & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \end{array} \right]$$

規格化

$$\left[ \begin{array}{c|c|c|c|c|c|c} & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \\ \hline & & & & & & \end{array} \right]$$

遷移

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 1/2 & 0 & 1/4 & 1/2 & 0 \\ 1/5 & 0 & 1/2 & 1/3 & 0 & 0 & 0 \\ 1/5 & 0 & 0 & 1/3 & 1/4 & 0 & 0 \\ 1/5 & 0 & 0 & 0 & 1/4 & 0 & 0 \\ 1/5 & 0 & 0 & 1/3 & 0 & 1/2 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1/4 & 0 & 0 \\ 1/5 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1/7 \\ 1/7 \\ 1/7 \\ 1/7 \\ 1/7 \\ 1/7 \\ 1/7 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \\ \\ \\ \\ \\ \\ \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0.32 \\ 0.15 \\ 0.11 \\ 0.06 \\ 0.29 \\ 0.04 \\ 0.03 \end{pmatrix}$$

## 4 累乗(べき乗)法により最大固有値が求まる原理

累乗(べき乗)法は、最大固有値とその固有ベクトルを効率的に見つける算法である。すこし、固有値について復習しておく。正方行列  $A$  に対して、

$$A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x} \quad (5)$$

の解  $\lambda$  を固有値、 $\mathbf{x}$  を固有ベクトルという。 $\lambda$  は、

$$\det(A - \lambda E) = 0 \quad (6)$$

として求まる永年方程式の解である。

では、なぜ適当な初期ベクトル  $\mathbf{X}_0$  から始めて、反復

$$\mathbf{X}_{k+1} = A\mathbf{X}_k \quad (7)$$

を繰り返すと、 $A$  の絶対値最大の固有値に属する固有ベクトルに近づいていくのを見ておこう。

すべての固有値がお互いに異なる場合を考える。今、行列の固有値を絶対値の大きなもの順に並べて、 $|\lambda_1| > |\lambda_2| > \dots > |\lambda_n|$  とし、対応する長さを1に規格化した固有ベクトルを  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_n$  とする。初期ベクトルは固有ベクトルの線形結合で表わせて、

$$\mathbf{X}_0 = c_1\mathbf{x}_1 + c_2\mathbf{x}_2 + \dots + c_n\mathbf{x}_n \quad (8)$$

となるとする。これに行列  $A$  を  $N$  回掛けると、

$$A^N\mathbf{X}_0 = c_1\lambda_1^N\mathbf{x}_1 + c_2\lambda_2^N\mathbf{x}_2 + \dots + c_n\lambda_n^N\mathbf{x}_n \quad (9)$$

となる。これを変形すると、

$$A^N\mathbf{X}_0 = \mathbf{X}_N = c_1\lambda_1^N \left\{ \mathbf{x}_1 + \frac{c_2}{c_1} \left( \frac{\lambda_2}{\lambda_1} \right)^N \mathbf{x}_2 + \dots + \frac{c_n}{c_1} \left( \frac{\lambda_n}{\lambda_1} \right)^N \mathbf{x}_n \right\} \quad (10)$$

となる。 $|\lambda_1| > |\lambda_i| (i \geq 2)$  だから括弧の中は  $\mathbf{x}_1$  だけが生き残る。

こうして最大固有値に属する固有ベクトルが、反復計算を繰り返すだけで求められる。

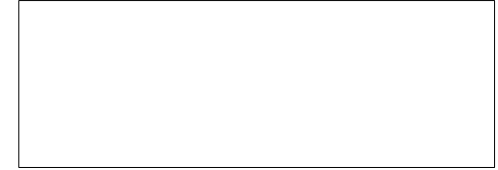
## 5 Jacobi回転による固有値の求め方

固有値を求める手法として、永年方程式を解くというやり方は回りくどすぎる。少し古めかしいが非対角要素を0にする回転行列を反復的に作用させる Jacobi(ヤコビ)法を紹介する。現在認められている最適の方策は、ハウスホルダー(Householder)変換で行列を単純な三重対角化行列に変形してから、反復法で解を追い込んでいくやり方である。Jacobi法は、Householder法ほど万能ではないが、10次程度までの行列には今でも役に立つ。

### 5.1 Mapleでみる回転行列

行列の軸回転の復習をする。対称行列  $B$  に回転行列  $U$  を作用すると

$$B.U = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos(\theta) & -\sin(\theta) \\ \sin(\theta) & \cos(\theta) \end{pmatrix} \quad (11)$$



(12)

となる。回転行列を 4x4 の行列に

$$U^t B U \quad (13)$$

と作用させたときの各要素の様子を以下に示した。

```
> restart;
n:=4;
with(LinearAlgebra):
B:=Matrix(n,n,shape=symmetric,symbol=a);

B := \begin{bmatrix} a_{1,1} & a_{1,2} & a_{1,3} & a_{1,4} \\ a_{1,2} & a_{2,2} & a_{2,3} & a_{2,4} \\ a_{1,3} & a_{2,3} & a_{3,3} & a_{3,4} \\ a_{1,4} & a_{2,4} & a_{3,4} & a_{4,4} \end{bmatrix}

> U:=Matrix(n,n,[[c,-s,0,0],[s,c,0,0],[0,0,1,0],[0,0,0,1]]);
#U:=Matrix(n,n,[[c,-s],[s,c]]);

U := \begin{bmatrix} c & -s & 0 & 0 \\ s & c & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}

> TT:=Transpose(U).B.U;
```

$$\begin{aligned}
& TT := \\
& \left[ (c a_{1,1} + s a_{1,2}) c + (c a_{1,2} + s a_{2,2}) s, -(c a_{1,1} + s a_{1,2}) s + (c a_{1,2} + s a_{2,2}) c, \right. \\
& \left. c a_{1,3} + s a_{2,3}, c a_{1,4} + s a_{2,4} \right] \\
& \left[ (-s a_{1,1} + c a_{1,2}) c + (-s a_{1,2} + c a_{2,2}) s, -(-s a_{1,1} + c a_{1,2}) s + (-s a_{1,2} + c a_{2,2}) c, \right. \\
& \left. -s a_{1,3} + c a_{2,3}, -s a_{1,4} + c a_{2,4} \right] \\
& \left[ c a_{1,3} + s a_{2,3}, -s a_{1,3} + c a_{2,3}, a_{3,3}, a_{3,4} \right] \\
& \left[ c a_{1,4} + s a_{2,4}, -s a_{1,4} + c a_{2,4}, a_{3,4}, a_{4,4} \right]
\end{aligned}$$

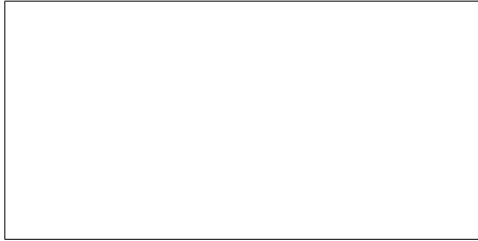
```

> expand(TT[1,1]);
expand(TT[2,2]);
expand(TT[1,2]);
expand(TT[2,1]);

```

$$\begin{aligned}
& c^2 a_{1,1} + 2 c s a_{1,2} + s^2 a_{2,2} \\
& s^2 a_{1,1} - 2 c s a_{1,2} + c^2 a_{2,2} \\
& -s c a_{1,1} - s^2 a_{1,2} + c^2 a_{1,2} + c s a_{2,2} \\
& -s c a_{1,1} - s^2 a_{1,2} + c^2 a_{1,2} + c s a_{2,2}
\end{aligned}$$

この非対角要素を0にする $\theta$ は以下のように求まる。



(14)

このとき注目している $i, j = 1, 2$ 以外の要素も変化する。

```

> expand(TT[3,1]);
expand(TT[3,2]);

```

$$\begin{aligned}
& c a_{1,3} + s a_{2,3} \\
& -s a_{1,3} + c a_{2,3}
\end{aligned}$$

これによって一旦0になった要素も値を持つが、なんども繰り返すことによって、徐々に0へ近づいていく。

## 5.2 Jacobi法による固有値を求めるCコード

以下にはヤコビ法を用いた固有値と固有ベクトルを求めるコードを示した。結果は、固有値とそれに対応する規格化された固有ベクトルが縦 (column) ベクトルで表示される。

リスト 1: ヤコビ法。

```

#include <stdio.h>
#include <math.h>

#define M 10
void PrintMatrix(double a[M][M], int n);

int main(void){
    double a[M][M],v[M][M];
    double eps=0.0001,div,r,t,s,c,apj,aqj,aip,aipq,vip,viq;
    int i,j,n,iter,count,iterMax=1000000,p,q;

    scanf("%d",&n);
    for(i=1;i<=n;i++){
        for(j=1;j<=n;j++) scanf("%lf",&a[i][j]);
    }
    PrintMatrix(a,n);
    for(i=1;i<=n;i++){
        for(j=1;j<=n;j++) v[i][j]=0.;
        v[i][i]=1.;
    }

    for(iter=1;iter<=iterMax;iter++){
        count=0;
        for(p=1;p<=n-1;p++){
            for(q=p+1;q<=n;q++){
                if(fabs(a[p][q])<eps) continue;
                count++;
                div=a[p][p]-a[q][q];
                if (div != 0.0){
                    r=2.0*a[p][q]/div;
                    t=0.5*atan(r);
                } else {
                    t=0.78539818;
                }
                s=sin(t);
                c=cos(t);
                for(j=1;j<=n;j++){
                    apj=a[p][j];
                    aqj=a[q][j];
                    a[p][j]=apj*c+aqj*s;
                    a[q][j]=-apj*s+aqj*c;
                }
                for(i=1;i<=n;i++){
                    aip=a[i][p];

```

10

20

30

40

```

        aiq=a[i][q];
        a[i][p]=aip*c+aiq*s;
        a[i][q]=-aip*s+aiq*c;
        vip=v[i][p];
        viq=v[i][q];
        v[i][p]=vip*c+viq*s;
        v[i][q]=-vip*s+viq*c;
    }
    printf("p,q=%3d,%3d\n",p,q);
    PrintMatrix(a,n);
}
}
if (count==0) break;
}
printf("Eigen values:\n");
for(i=1;i<=n;i++) printf("%6.2f",a[i][i]);
printf("\nEigen vectors:\n");
PrintMatrix(v,n);

return 0;
}

void PrintMatrix(double a[M][M], int n){
    int i,j;
    for(i=1;i<=n;i++){
        for(j=1;j<=n;j++) printf("%6.2f",a[i][j]);
        printf("\n");
    }
    printf("\n");
}

```

---

## リスト 2: ヤコビ法の計算結果.

---

```

[BobsNewPBG4:~/NumRecipe/chap8] bob% cat input.txt
4
5 4 1 1
4 5 1 1
1 1 4 2
1 1 2 4

BobsNewPBG4:~/NumRecipe/chap8] bob% Jacobi2<input.txt
5.00 4.00 1.00 1.00
4.00 5.00 1.00 1.00
1.00 1.00 4.00 2.00
1.00 1.00 2.00 4.00

p,q= 1, 2
9.00 -0.00 1.41 1.41
-0.00 1.00 -0.00 -0.00

```

```

1.41 -0.00 4.00 2.00
1.41 -0.00 2.00 4.00

p,q= 1, 3
9.37 -0.00 -0.00 1.88
-0.00 1.00 0.00 -0.00
-0.00 0.00 3.63 1.57
1.88 -0.00 1.57 4.00

p,q= 1, 4
9.96 -0.00 0.47 -0.00
-0.00 1.00 0.00 0.00
0.47 0.00 3.63 1.50
0.00 0.00 1.50 3.41

...<中略>...

Eigen values:
10.00 1.00 5.00 2.00
Eigen vectors:
0.63 -0.71 -0.32 0.00
0.63 0.71 -0.32 0.00
0.32 0.00 0.63 -0.71
0.32 0.00 0.63 0.71

```

---

## 6 数値計算ライブラリーについて

一般の数値計算ライブラリーについては、時間の関係で講義ではその能力を紹介するにとどめる。昔の演習で詳しく取り上げていたので、研究や今後のために必要と思うときは、テキストを取りにおいで。

行列の計算は、数値計算の中でも特に利用する機会が多く、また、律速ルーチンとなる可能性が高い。そこで、古くから行列計算の高速ルーチンが開発されてきた。なかでも BLAS と LAPACK はフリーながら非常に高速である。

前回に示した、逆行列を求める単純な LU 分解法を C 言語でコーディングしたものと、LAPACK のルーチンを比べた場合、1000 次元の行列で計測すると

```

> 1000 [dim]      2.5200 [sec] #BOB
> 1000 [dim]      0.4700 [sec] #LAPACK

```

となった。用いた PC は MacBook(2GHz Interl Core Duo) であるが、この計算での 0.47 秒は 1.4GFLOP に相当する。さらに 07 年の MacBook(2GHz Interl Core 2 Duo) ではさらに早くなって

```

bob% gcc -O3 bob.c -o bob
bob% ./bob
1000
1000 [dim]      1.7543 [sec] #BOB
bob% gcc -O3 lapack.c -llapack -lblas -o lapack
bob% ./lapack
1000
1000 [dim]      0.1893 [sec] #LAPACK

```

で、3.5GFLOPSが出ている。

ライブラリーは世界中の計算機屋さんがよってたかって検証しているので、バグがほとんど無く、また、高速である。初学者はライブラリーを使うべきである。ただし、下のサンプルプログラムの行列生成の違いのように、ブラックボックス化すると思わぬ間違い（ここではFortranとCとの行列の並び方の違いが原因）をしでかすことがあるので、プログラムに組み込む前に必ず小さい次元（サンプルコード）で検証しておくこと。

ちょっと長いが時間があればフォローせよ。

リスト 3: 西谷製 lazy 逆行列計算プログラム、

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <math.h>
#include <time.h>

//#undef PRINT
//#define PRINT

void printMatrix(double *a, double *b, long n);
int MatrixInverse(double *a, double *b, long n);

int main(void){
    clock_t start, end;
    int i,j;
    long n;
    double *a,*b;

    scanf("%ld",&n);

    a=(double *)malloc(n*n*sizeof(double));
    b=(double *)malloc(n*n*sizeof(double));

    for (i=0;i<n;i++){
        for (j=0;j<n;j++){
            a[i*n+j]= 2*(double) random() / RAND_MAX - 1.0;
        }
    }
}

```

```

for (i=0;i<n;i++){
    b[i]= 2*(double) random() / RAND_MAX - 1.0;
}
printMatrix(a,b,n);

start = clock();
MatrixInverse(a,b,n);
end = clock();
printf("%5d [dim] %10.4f [sec] #BOB\n",
        n,(double)(end-start)/CLOCKS_PER_SEC);
printMatrix(a,b,n);

free(a);
free(b);
return 0;
}

int MatrixInverse(double *a, double *b, long n){
    double *x;
    double pvt=0.00005,am;
    int i,j,k;

    x=(double *)malloc(n*sizeof(double));

    for(i=0;i<n-1;i++){
        if(fabs(a[i*n+i])<pvt){
            printf("Pivot %3d=%10.5f is too small.\n",i,a[i*n+i]);
            return 1;
        }
        for(j=i+1;j<n;j++){
            am=a[j*n+i]/a[i*n+i];
            for(k=0;k<n;k++){ a[j*n+k]-=am*a[i*n+k];
                b[j]-=am*b[i];
            }
        }
        //Backward substitution
        for(j=n-1;j>=0;j--){
            x[j]=b[j];
            for(k=j+1;k<n;k++){
                x[j]-=a[j*n+k]*x[k];
            }
            b[j]=x[j]/=a[j*n+j];
        }
        free(x);
        return 0;
    }

    void printMatrix(double *a, double *b, long n){
        int i,j;
        #ifndef PRINT
        printf("\n");
        for (i=0;i<n;i++){
            for (j=0;j<n;j++){

```

```

        printf("%10.5f",a[i*n+j]);
    }
    printf(":%10.5f",b[j]);
    printf("\n");
}
printf("\n");
#endif
return;
}

```

---

リスト 4: LAPACK 謹製 smart 逆行列計算プログラム.

---

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <time.h>
#include <vecLib/vecLib.h>

```

```
void printMatrix(double *a, double *b, long n);
```

```

int main(void){
    clock_t start, end;
    int i,j;
    double *a,*b;
    long n,nrhs=1, lda,ldb, info, *ipiv;

```

```

    scanf("%ld",&n);

```

```

    a=(double *)malloc(n*n*sizeof(double));
    b=(double *)malloc(n*sizeof(double));
    lda=ldb=n;
    ipiv=(long *)malloc(n*sizeof(long));

```

```

    for (i=0;i<n;i++){
        for (j=0;j<n;j++){
            a[j*n+i]= 2*(double) random() / RAND_MAX - 1.0;
        }
    }

```

```

    for (i=0;i<n;i++){
        b[i]= 2*(double) random() / RAND_MAX - 1.0;
    }
    printMatrix(a,b,n);

```

```

start = clock();
dgesv_(&n, &nrhs, a, &lda, ipiv, b, &ldb, &info);
end = clock();
printf("%5d [dim] %10.4f [sec] #LAPACK\n",
        n, (double)(end-start)/CLOCKS_PER_SEC);
printMatrix(a,b,n);

```

```

free(a);
free(b);

```

```

free(ipiv);

return 0;
}

```

---

PrintMatrix は bob と同じなので省略, OSX では

```
gcc -O3 -UPRINT lapack.c -llapack -lblas
```

とすればコンパイルできる. linux では LAPACK, BLAS がインストールされてい  
れば,

```
#include <vecLib/vecLib.h>
```

をコメントアウトして,

```
gcc -O3 -DPRINT lapack.c -L/usr/local/lib64 -llapack -lblas -lg2c
```

などとすればコンパイルできるはず.

## 課題

- 4x4 の行列を適当に作り, Maple で固有値を求めよ. 求め方はマニュアルを参照せよ.
- Jacobi 法によって固有値を求めよ.
- LAPACK に含まれている dseyyv 関数を用いて固有値を求めよ. (演習で詳しく取り上げている. 研究や今後のために必要と思うときは, テキストを取り  
おいで)